人殺しの作った作品はお好きですか?

ワーグナーの反ユダヤ主義

2022/06/17

Cena in Emmaus,1601

人殺しの芸術家もいます。画家のカラバッジョ（Michelangelo Merisi da Caravaggio 1571-1610）がそうです。カラヴァッジョは、賭博に絡んで友人を殺してしまいます。懸賞金を掛けられてローマを逃げ出さなければなりませんでした。ところが、特に、彼の宗教的な作品は宗教心溢れる名作ばかりです。

殺人者の宗教画

『エマオの晩餐』（1601）では、はじめてイエスだと気がついた旅人がその驚きを大きく手を広げて大げさに現しています。この左右に広げられた両手は先ほど十字架に張り付けになったばかりのイエスの姿そのものを現しているのです。これは私たちの驚きそのものです。

『キリストの埋葬』（1603 ～ 04）では、イエスの死に驚き嘆く女（クロパの妻マリア）の姿を、すべての信者たちの代表として劇的に描いています。

『ロレートの聖母』（1603）は、長旅をやって来た二人の巡礼の農夫の前に、裸の幼児キリストを抱いた裸足の聖母マリアの幻影が現れます。裸足の農夫の足の裏は土で汚れたままです。ここには、聖母マリアの尊さもイエスの聖的な尊厳も崇拝する貴族の姿も周りを飛び回る天使の姿も描かれてはいません。このカヴァレッティ礼拝堂から依頼された聖母マリアの絵は、イエスもマリアも農夫と同じ裸足で優雅な衣装も着けていないので、ライヴァルの画家が「不敬で聖母子を中傷している」として裁判を起こし、裁判所も、「この作品が公開されると大衆の嘲笑の的となり大騒ぎを巻き起こすことは間違いない」という理由でカラヴァッジョを有罪にして投獄しました、でもここには、殺人者としてのカラヴァッジョの異様さは感じられません。

人殺しの画家カラヴァッジョと作品との間には、「殺人感」「殺人性」「殺人的なもの」はどこにもないのです。

殺人者のマドリガル

人殺しの作曲家もいます。イタリアの貴族で後期ルネサンスの作曲家カルロ・ジェズアルド（Carlo Gesualdo：1566-1613）がそうです。妻の不倫を知ったジェズアルドは狩の遠出に出かけると偽って手下を連れてナポリの宮殿に乗り込み、妻とその愛人を寝台の上で惨殺しました。「重ねて置いて四つにする」という江戸時代の名文句のとうりです。ジェズアルドの作風に殺人者的なものがないかいといえばあります。彼の強烈で衝撃的な半音階進行は、劇的で悲劇的な感じがします。緩やかなパッセージと急速なテンポによる全音階的なパッセージとの交替もまた、暴力的なものです。でも、それが広く受け入れられ、来るべきバロックの予兆であるとされるならば、決しお咎（とが）めにあうものではありません。

ユダヤ人嫌いと反ユダヤ主義

さて、ワーグナー（1813-1883）です。ワーグナーの文章や言動には、「ユダヤ人嫌い」がはっきりと現れています。特に、同じ時代のユダヤ人の作曲家マイヤベーアやメンデルスゾーンに向けられて書かれた論文『音楽におけるユダヤ性』（1850）は、すさまじいほどの嫌悪感を示しています。ヒトラーがそれを利用して、ワーグナーの聖地バイロイトで「戦争バイロイト」を開きました。ユダヤ人の国イスラエルでは、長い間、ワーグナーの音楽は演奏されませんでした。でも、昨今、「ユダヤ人嫌い」（英：judeophobia,独：Judenhass）と「反ユダヤ主義」（antisemitism） とは区別して用いられています。ワーグナーは、特定の、自分を応援してくれない非友人のユダヤ人は嫌いだが、自分を応援してくれるユダヤ人とは友好を結んでいるのです。

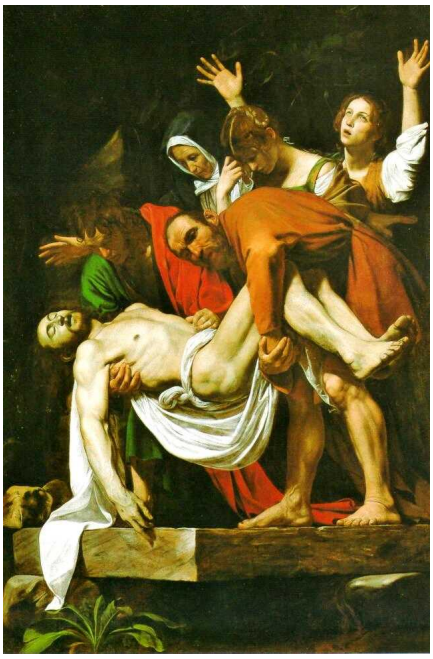
作品と芸術家の人生とはどこかで線を引かなければなりません。でも、作品の中に、「人殺し的なもの」（バロック音楽にはたくさんあります）や「反ユダヤ人的なもの」（バッハの音楽にはたくさんあります）が感じられれば別です。ハイデガーはナチス党員でした。彼の哲学には、ナチス的なものが強く感じられます。

その臭いを嫌う哲学者たちがいても当然です。ワーグナーの楽劇に「反ユダヤ主義」を感じる人も多くおいででしょう。《ニーベルングの指環》のニーベルング族への憎悪がそれです。中には、ユダヤ人であった義父の例からも、ワーグナー自身がユダヤ人であるという疑いももたれていて自己弁護的なものも感じられます。

ワーグナーのイーディッシュな音楽

もし彼本人が極端な「ユダヤ人嫌い」であり、人種差別的な「反ユダヤ主義者」であっても、彼の作品を「悪」だと簡単に裁くことは出来ません。経済学者たちが、資本主義と社会主義に分かれて、相手の方が労働者を差別していると訴えても、どちらかが悪者であるとか正義の使者であるとかは言えないからです。でも、不思議なことに、良く聞いてみると、彼の音楽は、基本的には「イーディッシュ」(ユダヤ的:ドイツ語: Jiddisch、英語: Yiddish)なのです。バッハやリヒャルト・シュトラウスのような「反ユダヤ主義的」な音楽は見つかりません。ユダヤ人の音楽は、中国の蘇軾(そしょく)の詩『前赤壁賦』(さきのせきえきのふ)ではないのですが、「如泣如訴、余音嫋嫋、不絶如縷」(泣くが如く訴えるが如く、泣くように、恨むように、残る声 音は細々と絶えざることは糸に似て)です。不思議なことに、ワーグナーの「示導動機」と「無限旋律」と「トリスタン和音」はまさにこの絶えざること「縷」(る)のごとき状態です。ワーグナー自身は「ユダヤ人嫌い」で「反ユダヤ主義者」ですが、彼の音楽そのものは極めて「イーディッシュ」なのです。この綿々情々たる「ユダヤ的な音楽」を好まない方もおいででしょう。さあ、みなさまは、「ワーグナーとユダヤ人」について、この矛盾をどうお考えでしょうか?

都築正道



Deposizione 1603-1604

Madonna dei Pellegrini 160-04